

芥川龍之介『南京の基督』論

——宋金花の〈祈り〉における宗教性——

足 立 直 子

一、〈祈り〉のモチーフ

『南京の基督』（『中央公論』大正九（一九二〇）年七月）は全三章から成る小説で、一・二章は「或秋の夜半」から翌朝まで、三章はそれから数か月後である「翌年の春の或夜」に時間が設定されており、一・二章で展開された物語の顛末と、三章の後日談とが明確に対比される作品構成になっている。

研究史においては、このような構成自体の要請から、三章での旅行家の認識の提示が、一・二章で金花を中心に表現されてきた物語世界に対して如何なる位置を占めるのかについて、絶えず検討がなされて来た。特に、芥川の南部修太郎宛の書簡⁽¹⁾の公表は、結果的に三章で提示された事実を強調する役割を果たすことになり、金花の病が完治したと見る説⁽²⁾や、徴候が間歇的に消滅したにすぎないと見る説⁽³⁾などの、金花の〈奇蹟〉の有りに迫る論傾向を促すことになった。つまり、こういった傾向は三章で旅行家が提示した事実から照射される形で、金花の〈奇蹟〉の真偽に重きを置く視点を中心に行っているとも言えよう。

ただし、このような金花におこった〈奇蹟〉に焦点を合わせていく論考が重ねられる一方で、金花の生き方そのものに焦点を合わせていく方向性での視点による指摘もなされている。例えば、宮坂覺氏は「日本人旅行家を通して金花のみを見ているのではなく、金花自身に芥川の熱っぽい視線が感じられる⁽⁴⁾」として、結末部の旅行家の認識を通してのみ金花像を見ていくのではなく、作品全体において金花そのものを直接的に見ていくことの必要性を指摘している。この視点は関口安義氏の「愚直な信仰者に対する龍之介の共感とあこがれを読む⁽⁵⁾」という指摘において更に強調され、また、細川正義氏は、

救いの手を差しのべる神と、その神に一点の疑いも抱かず信仰する金花との合致した「熱心な祈禱を捧げる」姿に凝集されていく世界である⁽⁶⁾

として金花への視点を作品世界の収束部にまで到達させる形で読み解いた。これらの流れを概観してみると、金花の生き方そのものに焦点を合わせていく方向性での視点というのは、結局、「熱心な祈禱を捧げる姿」に象徴されるような、愚直な信仰者としての金花像を浮き彫りにしていく試みであり、また、そういった形象を可能にならしめた芥川の愚直な人物への憧憬の念を確認していく作業であったことが分かる。こうした立場からの読みは、芥川文芸において、「聖なる愚人の系譜」とも言うべき愚直な人物に照明を当てていくモチーフが繰り返し扱われてきたことを想起しても首肯すべきものであるし、本稿もまたその立場に立つものである。ただし、ここで更に踏み込んで注目しておきたいのは、そういった金花の愚直さの内実を基督との関係において、より鮮明に表わしていると考えられる、彼女の〈祈り〉に關してである。

作品において二度に渡り印象的に描かれる金花の〈祈り〉であるが、その形象の背後にある芥川の意識を探るべく、彼の文芸の展開を振り返る時、その着想の源流は未定稿『老狂人』にまで遡らなければならない。明治四三（一

九一〇）年頃に執筆されたとされる『老狂人』は、未定稿であるにもかかわらず、芥川文芸における原点を示したものととして重要視され、論及されることの多い作品である。佐藤泰正氏が芥川文芸における人間の「根源の声」というものに着目する文脈において、この『老狂人』一篇に芥川の全生涯を貫く「無垢なる素型^①」があることを指摘したのはその代表的な例であるが、まさにこの作品は芥川の人間認識の核とも言うべきものを映し出す仕上がりとなっている。中心には「秀馬鹿」と呼ばれるキリスト教徒である老狂人の慟哭とへ祈りへの姿が、そして、その傍らには老人を覗き見て、その姿から「生の孤独を祈^{アツ}へる声」を聞き、「まことの『我』から起つてくる涙」を見ている「私」が据えられているという構図からは、人間存在において究極的にはへ祈りへが最後の拠り所となることを実感する意識が窺える。この人間の本質を凝視する芥川の眼差しが、以後、エゴイズムや悪を剔抉していくモチーフへと展開していくその流れは容易に推測できるところであるが、それと同時に自らの弱さに打ち拉がれ、懸命に祈り続ける人間への視点というものが彼の内にとどまり、『南京の基督』の金花の形象において結実化したと考えることも可能ではないだろうか。また、そこにおいてこの作品の宗教性が明らかになると見通している。

そこで本稿では芥川文芸におけるへ祈りへのモチーフ、つまり極限状況の中でへ祈りへが全ての支えになりうる人間存在への視点において、金花像に新たな照明を当ててみたいと考えている。そして、その中でも自己の病の治癒より、他人に移さないよう自己を守れと祈ることなど、金花の功利的判断に基づかない愚直さと、どこまでも自己を支える基督を想起し一切を委ねようとしている純朴な信仰の内実を特に考察していきたい。また、その視点に立つならば、金花の夢の場面も、彼女の内奥においては基督との邂逅として重要な様相を帯びることになるであろうし、更に、金花の基督への近しさの実感の過程そのものが全体を貫く重要なプロットとして浮上してくることになるであろう。そして、最終的にはこれらを踏まえつつ作品世界を捉え直すと同時に、当時の芥川のキリスト教に対する姿勢に

ついても明らかにしていきたいと考えている。

註(1) 南部修太郎宛書簡、大正九(一九二〇)年七月一日付、同年七月一七日付。

(2) 完治したとして見る説の代表的なものとして、三好行雄「『南京の基督』前後——」(『芥川龍之介論』筑摩書房、昭和五一(一九七六)年九月)、海老井英次「芥川文学作品論事典『南京の基督』」(三好行雄編『芥川龍之介必携』學燈社、昭和五四(一九七九)年二月)の論がある。

(3) 徴候が間歇的に消滅したにすぎないと見る説の代表的なものとして、鷲只雄「『南京の基督』新攷——芥川龍之介と志賀直哉」(『文学』昭和五八(一九八三)年八月)、笠井秋生「『南京の基督』——二通の芥川書簡をめぐって——」(『キリスト教文芸』二、昭和五九(一九八四)年一月)、栗栖真人「芥川龍之介『南京の基督』論」(『別府大学紀要』二五、昭和五九(一九八四)年一月)の論がある。

(4) 宮坂覺「『南京の基督』——金花のへ仮構の生へに潜むもの——」(『文芸と思想』四〇、昭和五一(一九七六)年二月、三六頁)。

(5) 関口安義「この人を見よ 芥川龍之介と聖書」(小沢書店、平成七(一九九五)年七月、一二六頁)。

(6) 細川正義「芥川龍之介『南京の基督』論」(『人文論究』四九―四、平成二二(二〇〇〇)年二月、一五頁)。

(7) 佐藤泰正「芥川 その作家以前」(『国文学』昭和四三(一九六八)年二月、五五頁)。

二、金花のへ祈りへの根底にあるもの

『南京の基督』は中国の大都市南京の奇望街を舞台としている。芥川が実際に中国を訪れたのは、大正十(一九二二)年三月から七月までであり、この作の執筆時点ではまだこの舞台となった南京の地には足を踏み入れていない。ただし、中国への訪問の希望は早くから抱いていたようで、大正七(一九一八)年十一月の書簡⁽¹⁾において既にその心

情を確認することができし、また、大正八（一九一九）年の夏には中国行きの計画が具体化していたことも、当時の書簡⁽²⁾から窺える。こういった訪中への思いが高揚する中、作品初出時の付記にも記されているように谷崎潤一郎の『秦淮の夜』（「中外」大正八（一九一九）年二月、「新小説」同年三月）を目にし、それにこの作の材を得て、まだ見ぬ南京の地を想像力で彩りながら作品世界を構築していったと言えよう。そのような舞台において、年老いた父を養い、また生計を立てる唯一の手段として奇望街に春をひさぐ一五歳の娼婦、金花の物語は展開していくのである。作品冒頭の場面において金花の有り様を示す、次の箇所は重要である。

少女の眼はこの耶穌を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間何処かへ見えなくなつて、その代りに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。

（傍線引用者）

早くに三好行雄は、ここでの金花の「寂しい色」と「希望の光」との対比を、「現実に出口のない部屋と、まだ小道具でしかない十字架の象徴性を通路として、外へ開かれた眺望との対比⁽³⁾」として指摘したが、確かにこの箇所からは金花の内には何らかの閉塞感に繋がるような寂しみがあり、十字架上の基督を眺めやった時だけ、その寂しみを忘れさせるような希望が生まれているということが読み取れる。また、金花が日常と対峙している際には寂しみを抱いていることが、先程の引用の続きの箇所の、彼女が十字架から再び視線を移すと、「必吐息を洩らし」、「肩を所在なさうに落し」、「西瓜の種をぽつりぽつり噛み出す」という姿を示しているところからも窺える。こういった金花の寂しみを先の三好は「現実に出口のない部屋」という象徴性において説明したが、更に彼女の心情に踏み込んでその内実を明らかにするならばどのように言えるであろうか。

そこで、彼女の心情が窺える箇所としてまず、若い日本の旅行家が、金花の部屋に或る晩、一夜を明かしに来た時の対話の内容について着目していきたいと考える。ここでは、旅行家が金花の基督信仰と娼婦という職業との間に矛

盾を感じ、そのことを「皮肉な調子」で口にしたのに対して、金花が「何時もの通り晴れ晴れと」笑みを洩らしながら、

この商売をしなければ、阿父様も私も餓死をしてみますから。

と答えている様子が示されている。そしてその続きの箇所では、旅行家の質問に対して、金花は「ちよいと十字架を眺めながら、考え深さうな眼つき」で、

天国にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それであれば基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。

と述べている。

ここで重要なのは彼女の答え方に窺える前後での微妙な相違である。先の自らの行為の正当性を保証すべき、餓えを回避するための論理を洩らした際には、「晴れ晴れ」としていた金花が、後の方では「考深さうな眼つき」をしなから答えているのである。このような答え方の相違の背景には、後の方では「姚家巷の警察署の御役人」を思い浮かべているということが関係している。つまり、この箇所では、金花が娼婦小屋の外での自らの位置を想起し、漠とした寂しさを抱えていることが分かるのである。よって、このことを踏まえるならば、金花の寂しきは自らが娼婦として、またこの閉ざされた空間である娼婦小屋の内でしか生きられないことの自覚に由来していると解せる。このことは後の祈りの中で自らの仕事を「賤しい商売」と述べていることから確認できる。ただし、そのような自覚は彼女の娼婦小屋が外の世界と相対化されない限り表面化されることのない質のものであり、その意味で娼婦小屋の内においては、それなりに金花の生活は安定したものであったと言える。しかし梅毒への感染がそういった状況に揺さぶりをかけ始め、先の冒頭の場面にあるように、日常に対峙している際の金花の寂しみの色を濃くさせていったと言え

る。よって見方を変えれば、金花の「寂しみ」は既に孤独な生の行く末が決定づけられた娼家に入った時以来のものであったが、娼婦小屋への客の出入りが頻繁な時はそれを自覚せずにおり、梅毒に感染し、思うように客もとれなくなって無聊をかこつようになる中で、無意識にも内から「寂しみ」が滲出するようになってきたと解せよう。

しかし一方で、まだそのような状況においてさえ彼女に「希望の光」を見せているのは、先の十字架上の基督を眺めやった箇所からも明らかのように、「歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰」である。金花の行状を規定していく要素として本文には、「生れつき」と「羅馬加特力教の信仰」の二つのものが挙げられているが「希望の光」に通じるものとしてはやはり「羅馬加特力教の信仰」の方をより厳密に見ていく必要がある。実際、当時の中国ではローマ・カトリック教の信者数というのはいく九二〇年の調査では約一九〇万人程度⁽⁴⁾であり、この数は当時の中国の総人口が四億一千万人から四億二千万人と言われている⁽⁵⁾ことから、その約〇・五%にすぎず、その数からいっても、金花の設定はある意味特異なものであることが分かる。よって、このような特異な設定が敢えて選択されたことを考慮しても、金花の信仰には重要な意味が託されていると推測できよう。

そして更に、そういった信仰を前提としつつ金花の有り様を見ていく上で看過できないのは、梅毒に感染した後が発している彼女の祈りの言葉である。

しかし何と申しても、私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陥らないものでもございません。天国にいらつしやる基督様。どうか私を御守り下さいまし。私はあなた御一人の外に、たよるものがない女でございますから。

朋輩に、梅毒を客へ移すように勧められ、そうするより病を治す方法はないと助言された金花は、初めて自己が「他人を不仕合せに致す」可能性を内包している存在であると自覚するに至る。つまり、この時初めて金花は自己が、例えば罪とも言うべき何ものかを背負う存在であることに思い至るのである。そしてそのことによって、彼女は切実に

祈るのであり、基督に自己を守ることを求めるのである。この祈りからは、朋輩の言葉によって自覚的になった自己の存在の危うさを見据え、そのことによってあおられた不安を素直に告白し、基督に向かって真摯によびかけている金花の純粹な信仰の姿が確認できる。よって、自己を守れというこの祈りの言葉からは、罪とも言うべきものの不安に怯える自らに対して、支えてくれるものを求めずにはいられない彼女の基督への強い仰望の念と、基督の御手にすべてを委ねようとする無垢なる信仰、そしてそのことによって不安から解放されたいとする痛切な心情が窺えるであろう。

以上のことを整理すると、金花の〈祈り〉の根底にあるのは、自らの不確かな生に対する寄る辺無さと密着したところにある揺らがぬ信仰心を前提として、この度、梅毒に感染するという出来事を通して自覚的になった不安の結果の、自らを支えてくれるべき基督の存在への切実な求めの念であると言える。

註(1) 西村貞吉宛書簡（大正七（一九一八）年一月二〇日付）において「僕も支那へ行きたいんだが銀相場は上つてゐるし金は更になし行きたい行きたいだけで暮らしてゐる」と言及している。

(2) 薄田泣菫宛書簡（大正八（一九一九）年七月三〇日付）において「小生は支那旅行をしない限り九月頃又書いても差支へ無之候」と言及している。

(3) 三好行雄、前掲論文、引用は三好行雄著作集『芥川龍之介論』第三卷（筑摩書房、平成五（一九九三）年三月、一七二頁）。

(4) 葛壮『宗教与近代上海社会的変遷』（上海書店出版社、一九九九年九月、二二八―二二九頁）。

(5) 侯楊方著、葛劍雄主編『中国人口史』第六卷（復旦大学出版社、二〇〇一年一月、二四八頁、二五九頁）。

三、基督との邂逅

先に、金花は基督の存在の実感を求めていることを指摘したが、その金花の常に基督を仰ぎ見ている無垢な信仰心が、或る晩、突然訪ねてきた外国人への心情に影響を与えていると考えられる。つまり、外国人を捉える金花の視点においては、

・一種の親しみを感じ出した。

・今まで彼女が見た事のある、どんな東洋西洋の外国人よりも立派であつた。

とあるように、金花はその外国人が部屋を訪ねてきた時から既に、まだはつきりと意識されていないにせよ、基督への思いと意識下でつながるものとして男に対して好感を抱いていたことが窺える。そして最終的には金花はその外国人に身を委ねていくことになるのであるが、本来ならば、ここで外国人に身を委ねていくのは、梅毒を患って以来決意してきた客に身を任せることを拒むという方針と抵触するため、避けられる必要があつた。しかし、それにも関わらず彼女が身を委ねていくのは、その外国人の顔と十字架上の受難の基督の顔とが「生き写し」であることに気付いたためである。厳密に言えば、金花の自己の生き方が脅かされる不安ゆえの、基督への仰望の強さそして信仰の厚さが、男が基督と似ているという事実によって、安心して身を任すことを促したのである。よって、ここは一見、行為自体においては基督への委ねの姿勢として理解できるのであるが、金花の心情においては「恋愛の歓喜」を感じていることから、彼女にとっては正統的な信仰の対象とはある種異なる、偶像崇拜にも近い強い求めや憧れの投影としての側面を持つ基督との対面であつたことが確認できるであろう。

金花は「御客と一つ寝台に寝ない」という健気な決心も忘れ、恍惚とした「恋愛の歓喜」の中で外国人に身を任せ

た夜、天国の基督の家で基督とともに、豪華な食卓を囲んで楽しい一時を過ごすという夢を見る。

この夢の中の基督との邂逅に関しては、既に高橋博史氏や、細川氏による指摘がある。高橋氏は基督の言葉の「私は支那料理は嫌ひだよ」を重要視し、「金花が基督によつて拒まれている⁽¹⁾」と指摘した。確かに、この基督の言葉からは、何らかの拒否性というものを読み取ることが可能である。しかし、ここで見誤つてはならないのは、その拒否される対象が金花ではなく支那料理であるという点である。つまり、この言葉は、先にも金花がキリスト者であるということの特異さを指摘したように、基督と支那との距離を象徴するものであると考えられよう。よつてここは細川氏が金花の純粹な信仰と仰望に対応する箇所としてこの場面を読み解いた⁽²⁾ように、基督が発した言葉以外にも目を向け、「無限の愛を含んだ微笑を洩らした」や「後から優しい接吻を与へた」などの行為から分かるように、金花の眼に映つた基督の優しさこそ確認すべきであろう。そして、その視点に立てば、先の基督の言葉は、金花に支那料理を気兼ねなく食べさせるための労りの言葉としても浮上してくる。結局これらのことから、金花に対して愛情をそそぐ基督像こそ着目されるべきであり、換言すれば、状況における齟齬の中でより強調される基督の金花への愛こそ着目されるべきであろう。その意味から言つても、この夢の場面は金花にとっては熱心な信仰と強い基督仰望の思ひの応答として読み解けるであろう。

このように夢の中で、外国人を基督であると認識した金花であつたが、夢から覚めた後、一旦は彼女はその男のことを「あの人」と呼んでおり、そこには男と基督を重ね合わせる認識はない。しかし、自己の病の治癒に気付いた瞬間、次のように洩らすのである。

ではあの人が基督様だつたのだ。

この言葉は注意が必要であらう。なぜなら、彼女は、基督が自らを救つてくれたことに対しては勿論であるが、それ

に加えて、この救いを通して、基督と出会ったことが現実であったと証明されたことに感動を覚えていることが窺えるからである。言うならば、基督との邂逅自体に感動し、心を高揚させているのである。

彼女は思はず襯衣の儘、転ぶやうに寝台を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に跪いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマгдаラのマリアのやうに、熱心な祈捧を捧げ出した。……

と、彼女が「再生の主と言葉を交はした、美しいマгдаラのマリア」と重ねられているのは、そのことを暗に示すものであり、大いなる神、ここでは自らが信仰してきた基督を、深刻なる状況の中で改めて実感し得た感謝の祈りが捧げられていると言える。よって、ここでの祈りは、基督への絶対的な信頼を前提としているという点では、「二」で考察した朋輩からの助言の後の祈りと共通しつつも、更に、共にいる基督を心からの喜びの中で実感し得ているという点では、彼女を如何なる苛酷な現実からも掬い挙げるものとして描き分けられているのである。

このようにして見た時、この作品は金花の長年の健気で愚直な信仰の有り様を基底に据えつつも、更に彼女が基督の存在をより深く実感していく過程こそが強調されていく構成になっていることが明らかになったと考えられる。

註(1) 高橋博史「南京の基督」(『芥川文学の達成と模索』至文堂、平成九(一九九七)年五月、一五二頁)。

(2) 細川正義、前掲論文、一四頁。

四、作品の収束部と芥川のキリスト教への姿勢

最後に、再び日本人旅行家が金花のもとを訪ね、*Odious truth*、即ち、金花の信じる基督が、実は混血の無頼漢であったという残酷な事実が、彼の内奥において提示される場面について考察を加えたい。この事実の提示によって、

読者にとって金花の未来に別なる可能性が生じ、信じ続ける金花との懸隔において作品空間に哀切感が漂い始めるのは間違いない。しかし重視すべきは、先程も述べたように、自らの不安を自覚した金花が、夢の中の基督との邂逅を通して、その基督の存在をより深く実感していく過程であり、そして、その基底に一貫してあった彼女の愚直なまでの誠実な信仰であろう。また、この事実を前にして、旅行家は、

この女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血児を耶穌基督だと思つてゐる。おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙つて永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……

というように彼女にそのことを知らせようか知らせまいかと迷うのであるが、この旅行家の戸惑いの内実としては既に、堀辰雄の「作者の人生に対する輕蔑に近い憐憫⁽¹⁾」という指摘を始めとして、「輕蔑」と「憐憫」を二極としてそれぞれの論者の立場から評価されてきた⁽²⁾。しかし、最終的に旅行家が金花に事実を言わずにいたことを考えるならば、更に踏み込んで、ここは基督の存在を実感しうる金花への愛しさにも近い心情を読み取るべきであろう。そして、旅行家が金花にこのような心情を抱き得たのは、彼女の如何なる状況の中でも揺らぐことのなかった基督への愚直な信仰に共感したからであり、そしてその基督信仰に幸福を見出すことのできる有り様に羨望の念すら抱いたからであろう。旅行家はそこに健気さや無垢さや純朴さなどと同時に、揺らがない強さなども見出したに違いない。

金花は西瓜の種を嚙りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。

という最後に提示されている彼女の有り様そのものが、作品世界における、旅行家の認識に何ら浸食されることのない金花の優位性を証明している。つまり、この作品において、金花は十字架上の基督を眺めやることによって大いなる安心を得ることのできる少女として描かれており、時に苛酷な現実に接しながらも、へ祈り〜という基督との対話によって自らの信仰がゆるぎないものとされている有り様が確認できる。結局、金花の信仰を中心にしたこの作品

は、夢の形象や日本人旅行家との対話を通して偶像崇拜的な側面をもつ金花の信仰における愚直さを浮き彫りにしつつも、その核にある彼女の祈りの誠実さを軸として、揺らがないう人間像の提示という確固とした志向性を持った作品世界であると言えることができる。更に言えば、現実との接触によってできる金花像の陰影が、彼女の純粹さを悲哀感によって包摂し、そこに悲しくも美しいヒロイン像を完成させているのである。

こういった金花の信仰を軸として、作品空間を確認した時、金花はそれ以前の『きりしとほろ上人伝』（『新小説』大正八（一九一九）年三月）や『じゅりあの・吉助』（『新小説』大正八（一九一九）年九月）での愚直な信仰者たちの延長線上にありながらも、現実との接点の中で信仰者の〈祈り〉の様相が明確化されている視点の分だけ、描く芥川においては宗教に対する問題意識が現実味をもつて展開されていることが分かる。これは大正九（一九二〇）年当時の、芥川の切実な現実認識が背景にあるものとして考えることができ、大正七（一九一八）年の『地獄変』（『大阪毎日新聞』〔夕刊〕大正七（一九一八）年五月一日～二日〔五日、一六日休載〕、『東京日日新聞』〔夕刊〕同年五月二日～二日〔一八日休載〕）での芸術至上主義の限界の自覚、また芸術そのものに対するゆきづまり、日常への関心など、さまざまな要因の中で、理性や知性の限界を感じ始めた芥川が、そういった理性や知性を越えていくものとしてのキリスト教に関心を抱き始めたことが推測される。更に、冒頭で述べた懸命に祈り続ける人間への関心と当時の芥川の切実な現実認識とが一つになり、『南京の基督』の金花の〈祈り〉として結晶化がなされたとも言えよう。このことを踏まえた時、〈祈り〉のモチーフの展開は次のように整理される。

『老狂人』以後、本格的に作家活動に入ってから『尾形了齋覚え書』（『新潮』大正六（一九一七）年一月）、『じゅりあの・吉助』、『黒衣聖母』（『文章倶楽部』大正九（一九二〇）年五月）など、宗教的位相の中で人間の祈る姿が取り上げられていく。例えば『尾形了齋覚え書』においては子を思う母の姿とその子の祈り、そして祈りに対する神からの応

答としての奇蹟の話が展開される。この作品に関しては芥川自身、江口渙宛書簡の中で「實際ミラクルはもつと長く書く気でゐた⁽³⁾」と友人にもらしていたように、この作では祈る姿とともに「奇蹟」にも力点が置かれていたことが分かる。そして次の『じゅりあの・吉助』では「奇蹟」の要素はわずかに最終部の吉助の死後、彼の口から白い百合の花が咲き出たという場面にとどまり、作品の比重はむしろ、愚直な信仰者そのものに移行している。更に『黒衣聖母』にいたっては、孫を思う祖母の懸命な祈りは描かれるものの、奇蹟に関しては完全に皮肉な形で描かれる内容となっている。つまり、これらの展開を整理すると、一旦は祈る姿とともに、「奇蹟」にも力点が置かれていたのが、芥川の現実への認識が深刻化していくに従って、次第に「祈り」即ち、人間の内からの声、あるいは更に言うならば、自らをむなしくし、大いなるものへ頭を垂れる姿勢といったものに彼の関心が集約されてきたと見ることができるのである。このことは、『老狂人』以来の懸命に祈り続ける人間への視点が宗教的色彩を強めながら再び明確化してきたとも言えるであろう。そして『南京の基督』をはさみ、それ以降、『白』（『女性改造』大正二二（一九二三）年八月）の犬のお月さまへの祈りや、『歯車』（『文芸春秋』昭和二（一九二七）年一〇月）の僕の祈りに見られる罪の深淵からの救済の切なる求めとして展開していくと見通せるのである。

従来の研究においては、『南京の基督』は信仰者を不幸の現実に引きずりおろしたという点において、キリスト教との関係では積極的でない指摘がなされることもあった⁽⁴⁾。しかし、以上、考察してきた観点で言えば、つまり芥川文芸における「祈り」のモチーフの展開の中で金花像を捉えていくという視点において言えば、先程も触れたように、それまでの自らの有り様に疑問を感じ始めた芥川が、金花の「祈り」の誠実さを通してキリスト教と対峙しようとしていることが分かるのであり、更に、「祈り」こそが人間存在を厳しい現実から飛翔させていく、まさにその様相を捉えた点においてより積極的に評価されるべき作品であることが分かるであろう⁽⁵⁾。また、基督を仰ぎ見る人間

存在の内面における真実にこそ信頼をよせていこうとする、この時点での芥川のキリスト教への姿勢の一側面が明らかになっているとも言える。以上のことから、『南京の基督』は芥川が自らの内面に降り立ちつつ、祈ることを大きな信頼と喜びの中でもつことのできる人間存在への憧憬と、その〈祈り〉の誠実さに共感を寄せることによって紡ぎ出した作品世界であると結論づけることができる。

註(1) 堀辰雄「芥川龍之介論——芸術家としての彼を論ず——」(東京帝国大学卒業論文、昭和四(一九二九)年三月。引用は

関口安義編『芥川龍之介研究資料集成』第六卷、日本図書センター、平成五(一九九三)年九月、一七九頁。

(2) それぞれの論者による評価に関しては、笠井秋生氏(前掲論文)が整理している。

(3) 江口渙宛書簡、大正六(一九一七)年三月九日付。

(4) 笹淵友一「芥川龍之介のキリスト教思想」(『解釈と鑑賞』昭和三三(一九五八)年八月)。駒尺喜美「南京の基督」(駒尺喜美編『芥川龍之介作品研究』八木書店、昭和四四(一九六九)年五月)。

(5) 近年においては、関口安義氏(前掲書)、細川正義氏(前掲論文)が積極的観点で評価している。

*本文引用は『芥川龍之介全集』全六卷(岩波書店、平成八(一九九六)年四月)に拠る。

本稿は日本キリスト教文学会第三回全国大会(平成一四(二〇〇二)年五月一二日、於上智大学)での口頭発表を基にして書き改めたものです。大会発表の時にご教示下さいました諸先生方に感謝申し上げます。尚、本稿は学会事務局の要請で、論の要約したものを、「キリスト文学研究」第二〇号(平成一五(二〇〇三)年五月)に掲載させていただきましたので、併せてご参照下されば幸甚です。

(あだち なおこ・関西学院大学大学院文学研究科研究員)